

# 入院による透析患者の運動能力低下、 退院後の運動療法での変化

高木 宜史

医療法人社団つばさ T's Energy

# 第12回透析運動療法研究会 COI 開示

筆頭発表者名: 高木 宜史

演題発表内容に関連し、開示すべきCOI 関係にある企業などはありません。

# 背景

- 透析患者は様々な理由から入院する事が多く、日本透析医学会の「わが国の透析療法の現況」2017年末の慢性透析患者に関する集計では入院有の割合は男性40.3%、女性42.1%だった
- 長期に及ぶ入院は活動量減少から運動能力の低下が容易に起こり、転倒リスクを上げ生命予後を大きく左右する為、退院後に運動能力を回復する事は急務である

# 目的

- 入院による運動能力の低下を分析する
- 退院後の運動介入によって、運動能力がどれほど回復するのか検討する

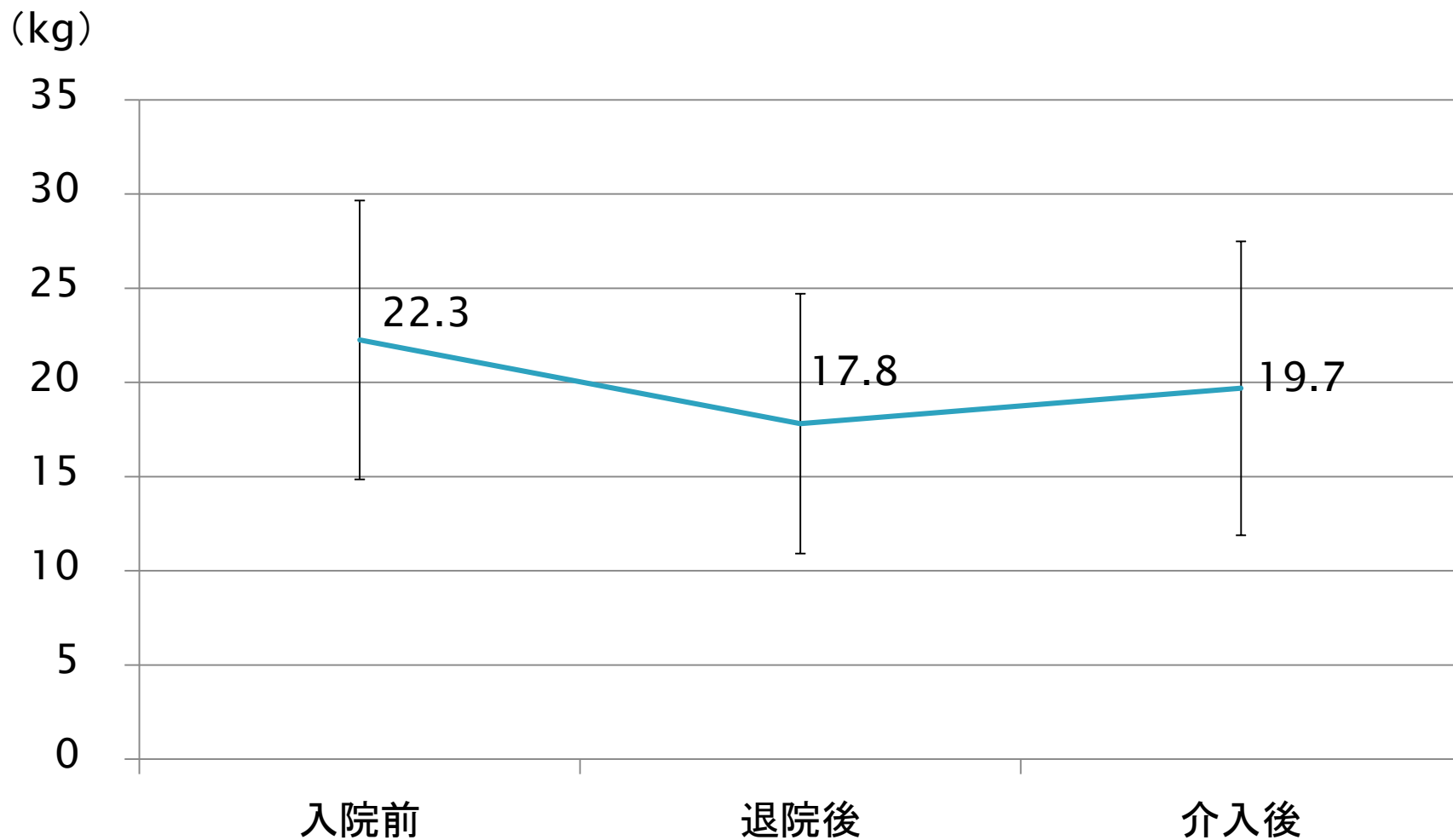
# 対象

- 当院に通院する外来維持血液透析患者のうち、2020年3月～2021年10月の間に10日間以上の入院をした患者8名(男性5名、女性3名)
- 年齢:  $78.1 \pm 3.5$ 歳
- 透析歴:  $11.3 \pm 9.4$ 年
- 入院期間:  $41.5 \pm 25.5$ 日間
- 入院の原因: 感染症1名、心疾患1名、肺疾患1名、腎疾患1名、悪性新生物1名、骨折(下半身2名、多数箇所1名)

# 方法

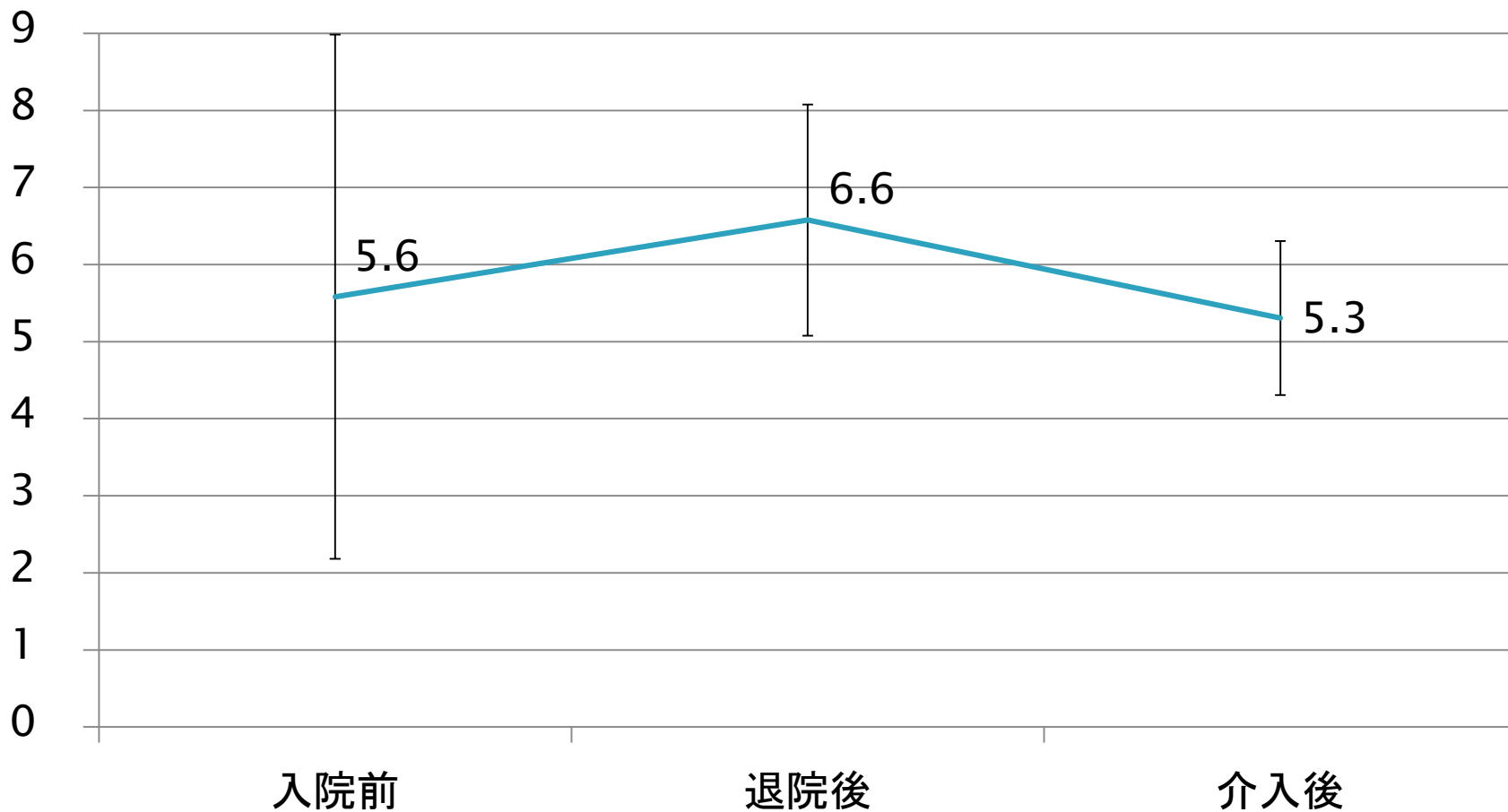
- ▶ 入院前、退院後、運動介入後の3点で運動能力測定結果を比較
- ▶ 運動介入は個々の患者に合わせたレジスタンストレーニングを週3回（透析前の実施6名、透析中の実施2名）
- ▶ 介入期間： 81 ± 54日
- ▶ 測定項目  
握力、6m歩行速度、CS-30、Weight Bearing Index (WBI)

# 結果： 握力



# 結果： 6M歩行

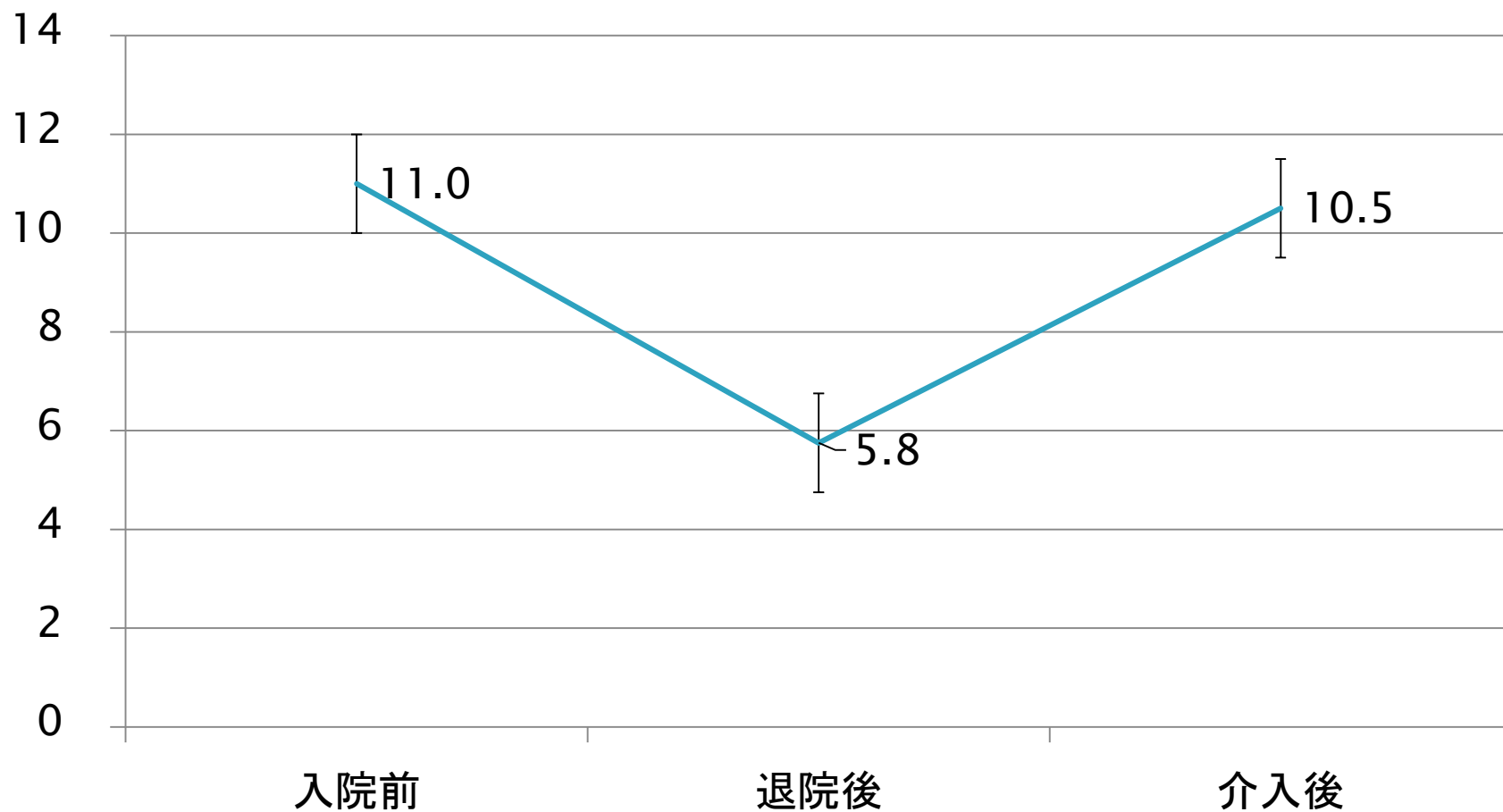
(秒)



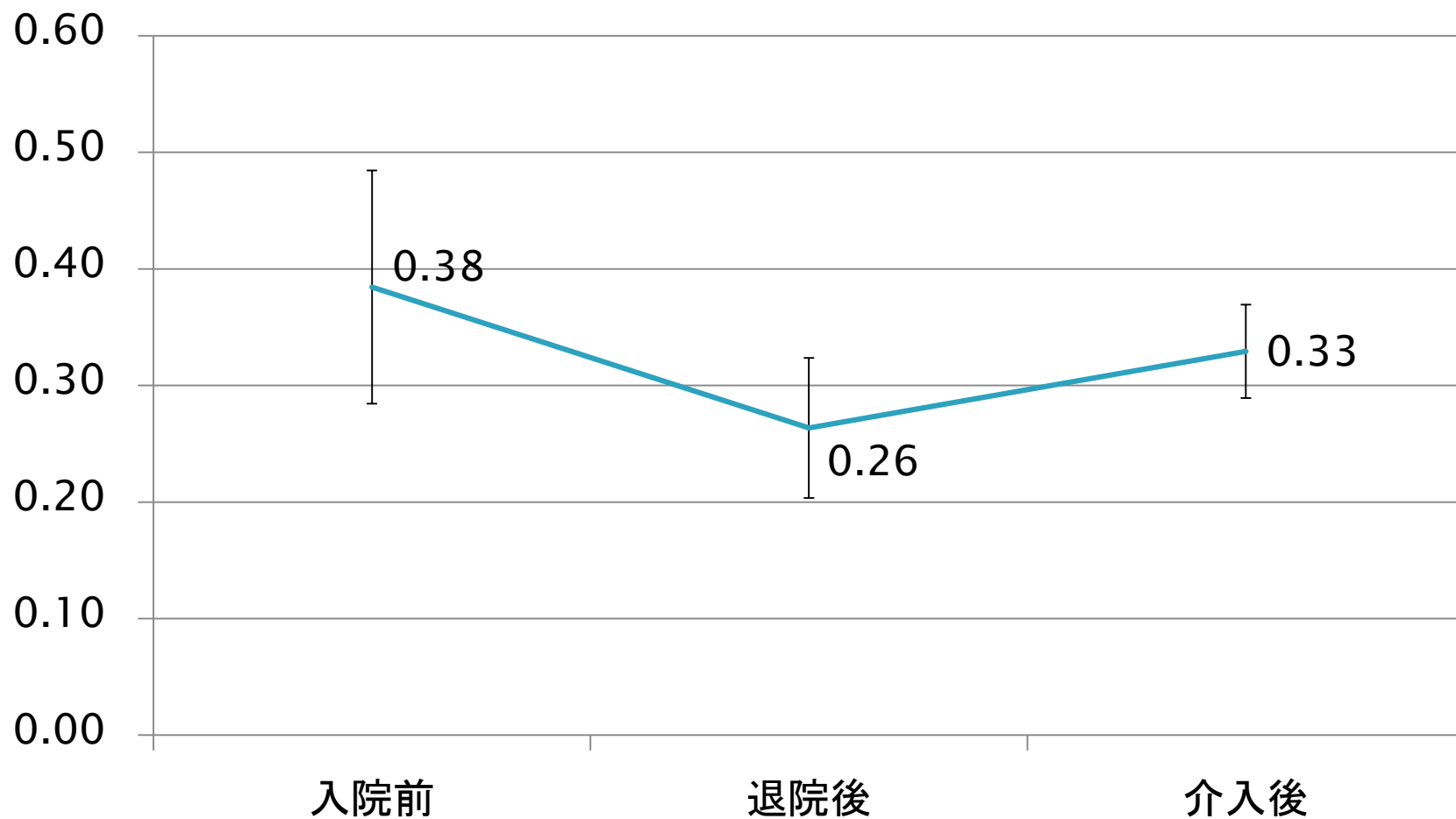


# 結果： CS-30

(回)



# 結果： WBI



# 考察

- ▶ 入院による下半身運動能力の減少は顕著であり、ADL低下に大きな影響を与えられとされる。特にCS-30に関しては実施出来ないほど衰えているケースも見られた
- ▶ 退院後の運動療法による運動機能回復効果は大きくADL改善にも寄与しているが、今回は運動機能回復まで入院期間の約2倍の運動介入期間がかかり、入院リスクを減らす事が必要と考えられる

# 結語

- ▶ 入院によって運動機能は大きく減少する
- ▶ 退院後の運動介入によって、運動機能は大きく回復する

ご清聴ありがとうございました

